

---

# 妖怪と現代妖怪

新垣慎二

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖怪と現代妖怪

### 【Nコード】

N4122Z

### 【作者名】

新垣慎二

### 【あらすじ】

妖怪好きな青年が行く話

(初投稿です。)

感想をください、

恋愛は出せるなら出します。

## プロローグ 大人になれない僕

俺が妖怪に惹かれ始めたのは何時の頃だっただろうか、  
たしか、小学生くらいの頃にはもう妖怪に夢中だったと思う。

妖怪、それは最も身近にある神秘。妖怪、それはおとぎ話の住人、  
毎日毎日、勉強も習い事も放り投げて、神社やお寺近くの山に行っ  
ては、

その不可思議な隣人たちを見つけ出そうとしていた。

読む本ももちろん妖怪に関するものばかりで、特に気に入っていた  
のは天狗、

それもかの有名な牛若丸に剣術を教えていたと言う鞍馬天狗が一番  
のお気に入りだった、

いつか会って武術を教えてもらいたい。そんなことを本気で思い、  
空手道場やらなにやらに行って武術を学んだ、

勉強も運動もなんでも中途半端にやっていた俺がこれだけは熱中し  
て練習に打ち込んだ、

このまま武術少年になってればよかったのかもしれないが、あいに  
くダメだった、

なぜなら合宿キャンプのオリエンテーションの一環で自分の夢を発  
表するという今思うとめんどくさくてたまらない行事があったのだ  
が、そこで先述した夢を話したのだが、、

まあ予想できるだろうが、当然皆に笑われた、そして合宿に帰った  
直後、道場を辞めた、

その後もいくつか柔道や剣道の教室や道場を回ったのだが長続きし  
なかった、

一つ例外があつたがそのほかは3週間もすれば辞めてしまった、一度冷めてしまえばまた熱くなるのには時間がかかる、その例外である道場でやっていければまた熱くなれたのかもしれないが、、、先生がお年で道場を閉めてしまったからな。

今、高校では剣道部をやっているが完全に幽霊部員だ、おそらく向こうは名前を覚えていないだろうし、こっちも部長以外は覚えていない。

・・・話がずれてしまった

ともかくその頃、皆に笑われてからだつただろう、「妖怪が好き、」それに苦痛を感じ始めていたのは、自分は真面目に妖怪を探している、だが皆にとつてはおれは滑稽な患者にしか見えない。

当然といえば当然だろう、何せ俺は高校生になつても未だに、つまり今でも妖怪の存在を信じていたのだから。当然周りは妖怪なんてものいつまでも信じるわけがない、そんなものは小学校を卒業するころにはみなすっかり成長し、常識を身に着けさつさと忘れ去るだろう。

そして俺はいつまでも小学生の心を忘れない、成長できないバカだった。

そして今、俺は某オカルト掲示板の住人と成っていた、その中でずっと埒のあかない、結論の出ないオカルト談義を続けていた。

こうして俺はただのオカルト好きな、妖怪の存在を信じ続けるただの変人として、いつまでもただただ腐って行くのだろう。そう思っていた。

新学期が始まつて暫く経ち、やっと身の回りが落ち着いてきたころ、その日、俺は掲示板のある心霊体験談を見ていた、

過去、妖怪たちが担っていた心霊現象は現代においてもはや幽霊がその位置を取って久しい。事実掲示板の投稿はほとんど幽霊ばかりで時々UMAが混じっているだけだった。

だがたまに妖怪に関する情報の書き込みがあることもないわけじゃない。

だがそのほとんどは某県の深い山地ばかりで都市圏の高校生である俺では調査しに行くための旅費がない、おまけに旅費を貯めていったとしても、

俺は行動力がある割にはコミュニケーション能力が不足しまくっている、一言でいえばぼっちだ。

現地の人々の話は人見知りでろくに聞くこともできず、（今ではすげえ後悔している、本場の民話を聞くチャンスだったのに、、、）もちろんそれで一緒に行って協力し合える友達なんてものは居るわけがない。

それで書き込みに書いてあった山奥に突撃したものだから何度も遭難しかけ、去年の春、ついに遭難してしまった、

俺の両親は激怒した、必ず、かの邪智愚昧の息子を正さねばならぬと決意した。

とまでは言わないが、めちゃくちゃ怒り、遂に旅行禁止令を貰ってしまった、

俺も両親が自分の事を心の底から心配してくれていると理解しているため頭が上がらなかつた、

もう遭難はこりこりだというのもあってもう山奥に赴くことはないだろう。

成果？聞く必要があるんだろうか。

そんなわけで俺はわざわざ遠出をしなくても調査しに行ける都市伝説について調べていた、

最近都市伝説、それも妖怪絡みの怪談が流行しているらしい、（と

言っても先述したとおりでいつもと比べればという感じだが、それも自分の家の近郊の都市圏での目撃が多い、何でも最近、真夜中の都市部にある神社や寺に「現代妖怪」とやらが百鬼夜行をなしており、それを見たものは幸せになるという何とも靈感商法チック、あるいは四葉のクローバーチックではつきり言え、

オカルト信者である俺から見ても胡散臭い話だった。

しかしだ、俺くらい純度のオカルトマニアになると本気で書き込んでいるのと面白半分釣りととの区別がつく、はずだ。そしてその書き込みはなんとというかこう、マジな感じがあつた、本当に目撃したかのような、その時の怖気が伝わってくるような感覚があつた。最近こういう感覚を感じる事が何度かある、遭難した時からだ、その時は本気で死ぬかと思つたからな、その経験からか感覚が鋭敏になつているのかもしれない。

そこで俺はその感覚と霊的直観を信じ調査に向かうことを決意した。

まあ単純に近所の神社にその「妖怪」とやらが居たという目撃談の書き込みがあつたので言ってみる気になつただけだ。期待はしていなかつた、所詮はインターネットの書き込みだ、そんな風に自分に言い聞かせていた。

しかし妖怪が、それも近所にでたなんてことを聞くとやはり心が躍つた、どこか期待している自分がいた、だからこそわざわざ丑三つ時にカメラを持ってまでして神社に向かつたんだ。

丑三つ時は本来幽霊の時間らしいがそんな気にはなかつた。

そして俺は見た、見てしまった、

あの瞬間は今でも心に焼き付いて離れない、

忘れられるはずもない、何せずと願つていた瞬間だつたんだ、

そしてすべてのきっかけでもあつた。

端的に言えばその日俺は、、、

妖怪を目撃した。

## 運命の罫體

春の夜、

そろそろ6月とはいえまだ肌寒い時期、それも真夜中の午前一時、ある青年が神社の影、石灯笼に隠れていた。

青年の髪はぼさぼさで染めてもいないが手入れもしていないのがすぐわかる、

顔は、まあ普通といったところだろう、代わりに身長は高く百八十cmはありそれに相応しいだけの体格だった。

だがその巨体と言っても過言でない体にさらに服を三枚、カーディナーとジャンパーをそれぞれ一枚着るものだから、

一見見ると肥満体にも見えた。

彼の名は時雨光一、この物語の主人公である。

「ふうー、、、いや、しつかしい月にいい星だな」

こうして急に独り言を言うのは正直変人にしか見えないだろうが、まあここには俺の他には誰もいない、

と言うか、いたら何もしゃべれないだろうしな、

「それにだ、こうして独り言を言っていないとやってられん、全く正確な時刻くらい書いてくれればよかったのによーたっく」

俺はここで現代妖怪と言う存在を待っている、そもそも来るかどうかすらわからない相手を待つのは正直辛い作業だ、

ぶっちゃけ暇で仕方がない、ケータイはもう飽きた、アプリゲームでもやればいいんだろうが、

母さんが許さないだろうからな、、

ともかくもう午前二時、丑三つ時はもう一時間で終わる、

現代妖怪は丑三つ時に出るなんて情報はないが、まあ明日の事を考えると後一時間が限界だろう、

俺はいまだに出てこない現代妖怪とやらの悪態をつきながら、石灯籠の影でじっと待っていた、

・・・いつ出てきてもいいように

ずっと俺はサンタを待つ子供のように待ち続けた、

三十分経過・・・

「、、来てくれよ現代妖怪さんよ、俺はあんたをずっと待ってるんだぜ、」

四十分経過・・・

「、、だめか、今回も」

サンタを待つ子供は幸せだろう、何せ、サンタはいないと知ってもプレゼントは貰える、

そしていつか簡単に忘れ去ることができるのだから。

五十分経過・・・

「だけどよ、だけどよ俺は、」

どこか諦めて、どこか悲しげに、サンタを否定されたくない子供のように、

時雨は待った、待ち続けた、そして、

午前三時

「、、、、、、、、」

ほらなやっぱり来なかった、いつもいつものとおりだ、

妖怪、どんなに出会いたくても俺は会えない。

「ただ俺はどんなことを言われても、世間がどう言おうと、諦めるつもりはない、諦めたくない、」

「そうやっていつも誓っていることを確かめながら、彼は神社から走って、逃げ去るように帰ろうとする。そして、そして彼は直前まで全く気が付かなかった。ずっとずっと彼が追い求めてきたもの、その片鱗が彼の目の前にずっといたことに、」

「、、、うおおあつ!!!?!」

「思い切りすつころぶ、なんだ急に、足元に何か出やがった。」

「。。。。」

「、、、は?」

「そんな声しか出なかった、当然だ、だって俺の足元にあるものは、骨だ、なぜか黄金に輝く骨、」

「影がある、いつの間にか、気が付かないのがありえないほどの影、俺は、、、それを見上げた、、、、。」

「がしゃどくろ、そう呼ばれる妖怪がそこにいた。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4122z/>

---

妖怪と現代妖怪

2011年12月19日23時53分発行